

## 読者の声

### 真駒内川の現状

新田 啓子

(札幌市、川の自然と治水を考える会)

改修工事前の真駒内川は両岸が河畔林で覆われ、都市河川でありながら景観がよかったです。露岩河床もあったが、砂利が豊富にあり、釣り人の姿をよく見かけ、秋にはサクラマスの産卵シーンが観察された。そして河畔林内の水辺にニホンザリガニが、沼ではエゾホトケドジョウが生息し、夜にはヘイケボタルが少ないながらも飛び交っていた。

しかし、2004年から北海道によって、計画高水流量（洪水時に各地点で流すことができる流量）を300m<sup>3</sup>/秒と決めた改修工事（真駒内一号橋～常盤一号橋の2.7km）が下流から進められた。2006年にno2斜路工の工事が再開し重機が入り、河床を掘削して斜路工を施工し、河川の流量を増やすため、川幅を広げ、住宅地側の木は無残にも皆伐された。そして景観のために工事時に採土した径30cmほどの大きい石を護岸に張り付け、その上に斜めに平たく盛土し、なんとも味気ない真駒内川と化し、近寄りづらくなってしまった。

2011年9月に断続的に雨が降り（最大流量170m<sup>3</sup>/秒）、完成したばかりの7基の斜路工が被災した。そのため、北海道は有識者4名で構成される「真駒内川河床低下対策検討会」を2011年12月に発足させた。検討会委員は、被災の原因を基礎岩盤（溶結凝灰岩（通称札幌軟石））が脆く、割れ目が生じたためと説明し、復旧工事対策としてより強固な斜路工が造られた。

しかし、復旧工事が完成して間もなく、2014年9月に大雨が降り（最大流量300m<sup>3</sup>/秒）、川はまた荒れた。三角状の波が生じた場所は、岩盤が流れに沿ってまっすぐに剥離し、剥離した部分に流路が固定され、そこは深堀している。

2012年夏、エゾホトケドジョウがいた沼がすでになかった。河床低下の影響で水位が下がり、沼が消滅した可能性がある。岩盤を保護する役目を持つ貴重な石を工事で掘削し、露岩化させ、河床低下がさらに進行して、工事は繰り返され、より大規模な工事となっている。

工事区間で河床が岩盤化し流速が早まると、上



改修工事前の藻南学園橋上流（2005年）



改修工事後の藻南学園橋（2013年）

流の芸術の森区間の砂利が流出し、芸術の森区間でも河床低下が顕著となり河岸崩壊が生じている。今後、砂礫を一時滞留させ河床低下を抑制するために石組工を数箇所に設置する計画であるが、砂利不足な上、岩盤河床となり、川幅を広くした今、河床低下の原因を解明し、根本的な対策（上流からの砂利の供給）が急務ではないだろうか。